

II-177

梯川に関する住民意識アンケート調査

建設省金沢工事事務所 正 員 ○常田 賢一
 建設省金沢工事事務所 正 員 小俣 篤
 建設省黒部工事事務所 黒田 勇一
 建設省金沢工事事務所 安達 忠浩

1. まえがき

梯川は、石川県小松市を貫流する1級河川である（図-1）。その上流部は溪流の様相を示すが、山地を抜け平野部に入ると河床勾配で約1/6000の緩流河川となる。梯川では、現在引堤を基本とした河川改修を進めている。現在のところ用地取得等が主であるので改修率は約5%である。梯川は市街地を貫流することから、堤防天端は散歩道や生活道路として、水面はレガッタや釣り等の場として市民に利用されている。この

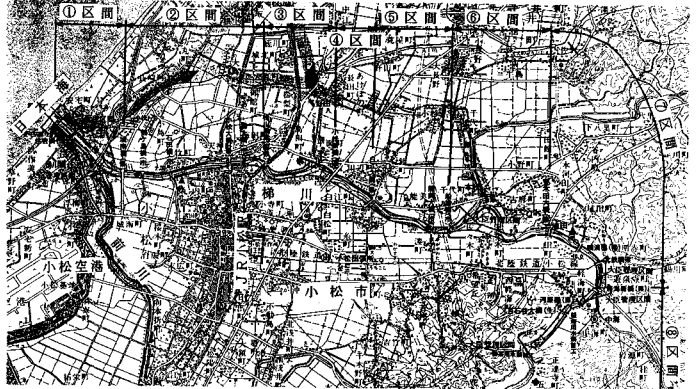


図-1 梯川平面図

ように梯川は、周辺の住民にとって比較的身近な存在であり、さらに春には野花が咲く旧堤は自然な環境として住民意識に根づいているようである。このような河川では、周辺の住民の河川改修に関する意識調査を行っておけば、今後の改修を進めるための貴重な参考資料を得られるものと考えられる。そこで、梯川にもつイメージや改修工事への要望等について、市民グループ「明日の小松をデザインする会」の協力を得てアンケート調査を行った。

2. アンケートの実施概要

アンケートの調査範囲は、梯川左右岸より約1kmの範囲にある72町内（人口約27千人）を対象とし、住民基本台帳より満6才以上を対象に被調査者を無作為抽出した。被調査者数は500人とした。アンケートは、1992年3月10日に配付し始め、同年3月20日までに回収した。有効回答者数は、232人（男性112人、女性120人）であった。

自然のある川
 人工的な川
 安全な川
 危険な川
 いこいの場
 魚釣りの場
 きれいな川
 きたない川
 魚のいない川
 いつも豊かに水が流れる川
 水の量の少なく濁った感じの川
 その他

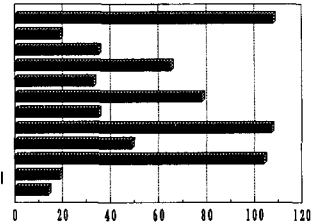


図-2 梯川のイメージ (人)

3. アンケートの調査結果

(1) 梯川のイメージ

梯川に持つイメージに関する設問より、選択頻度を集計した（図-2）。多く選択されたのは、「自然がある」「水が豊か」「きたない」というイメージであり、これらの反対の意味はあまり選択されていない。したがって、梯川は「自然のある水の豊かな川」であるけれども「きたない川」とイメージされているようである。次に因子分析を行った（図

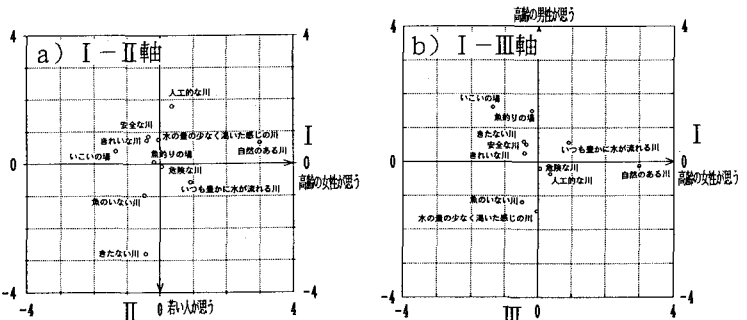
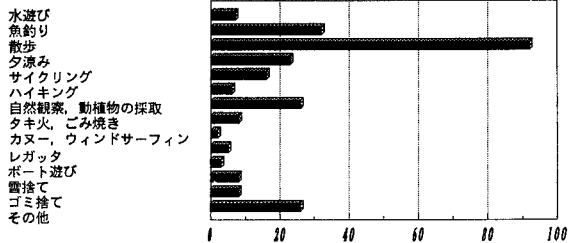


図-3 梯川のイメージ（因子分析）

－3）。ここで因子には、性別及び年齢層（少年、青年、中年、壮年、老年）を用いた。高齢の女性には「自然のある川」、高齢の男性には「憩いの場」「魚釣りの場」「安全な川」という比較的良好なイメージが多く持たれている。また、「いつも豊かに水が流れる」というイメージは、年齢性別に関係なく持たれている。一方、若い人は「きたない川」「魚のいない川」という悪いイメージを多く選択している。

(2) 梯川へ出かける目的

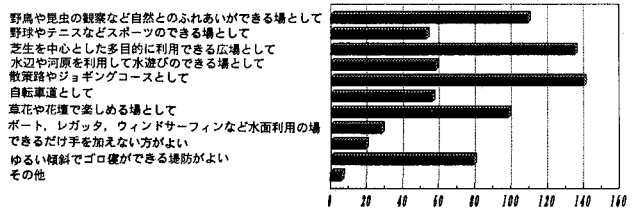
梯川へ出かける目的の集計結果を図－4に示す。「散歩」が圧倒的に多く、続いて「魚釣り」「夕涼み」「自然観察、動植物の採取」が多く選択されている。スポーツ型の項目の頻度は低く、全体的には身近な、日常的利用が卓越していることがうかがわれる。



図－4 梯川へ出かける目的 (人)

(3) 梯川に望まれている河川整備の姿

梯川に望む河川整備の姿に関する設問では、「芝生を中心とした多目的に利用できる広場として」「散策路やジョギングコースとして」「野鳥や昆虫の観察など、自然とのふれあいのできる場として」「草花や花壇で楽しめる場として」が多く選択されている（図－5）。すなわち、公園的な整備と自然保存型の整備の両方が望まれているようである。因子分析によると河川整備に望む姿は特に性別により異なり、女性



図－5 梯川に望まれている河川整備の姿 (人)

性は「草花や花壇で楽しめる場として」「野鳥や昆虫の観察など、自然とのふれあいのできる場として」「水辺や河原を利用して水遊びのできる場として」を、男性は「野球やテニスなど、スポーツのできる場として」を望む傾向が見られる。ただし、「芝生を中心とした多目的広場として」と「散策路やジョギングコースとして」は性別にもかかわらず選択されている。

(4) 区間別に望まれる将来像

アンケートには7つの整備された河川のパースを示し、図－1に示した①～⑧の区間毎に望まれている将来像を質問した。その結果を区間毎の順位として図－6に示す。下流から中流（①～④区間）にかけては、「緩傾斜の堤防」と「階段と植生の堤防」が好まれている。これは、市街地では河川敷へのアクセスの容易さ、散歩やオープンスペースの場としての河川への希望が強いと

区 間	下 流				上 流			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
一般の高水敷と低水護岸	2	6	5	7	6	6	6	4
緩傾斜の堤防	3	3	3	3	3	5	4	7
植生・草花の堤防	6	5	6	5	3	3	3	3
階段と植生の堤防	5	2	2	2	4	3	5	6
蛇行している河川	7	7	7	6	5	4	3	3
親水性の高い水辺	4	4	4	4	7	7	7	5
水辺が自然な河川	3	3	3	3	3	3	3	3

数字は、順位を示す。■■■■は、上位3位を示す。

図－6 区間別に望まれる将来像

「低水路の蛇行している河川」が好まれている。これは、田園地から山地の入口にかかる⑤～⑧の区間には、自然な川が望まれているためと考えられる。また、「水辺が自然な河川」は全域で高順位であった。

4. まとめ

今回のアンケートにより、多く住民の方が自然の残る身近な憩いの場として梯川の河川空間の再整備を望んでいることを把握することができた。また、河川に望む姿は、河川の区域、年齢や性別により少しずつ異なることが分かった。要約して表すと、梯川に望まれている姿は、広域的には自然の残った憩いの場であり、拠点的にはレガッタなどの水面利用や運動施設等の整備された高水敷である。いずれにしても、河川の利用実態や動植物の分布状況を踏まえ、市民に親しまれる河川整備の必要性が高い。本アンケートは「明日の小松をデザインする会」と共同で実施したものであり、同会の方々には多大な御尽力をいただいた。ここに記して深甚な謝意を表します。